

2018年10月28日礼拝説教要約
シリーズ・ダビデの生涯に学ぶ⑦

ダビデとサウル

(サムエル24・1〜22)

一、はじめに

神は、私たち一人ひとりに平安と将来と希望をたまわる御計画をお持ちですが(↓エレミヤ29・11)、私たちが考えるようには実現されないようです。人間が考える計画は、ふつう「起承転結」という順序があります。あるいは、「ホップ、ステップ、アンド、ジャンプ」という順序があります。しかし主なる神がなさる善き御計画の実現は、そのようにはならないようです。

二、ダビデとサウル

さて、ダビデはサウル王から執拗に疑われ、逃れていました。サウルは、主なる神によって王位からは退けられていたものの、現実にはイスラエルの王として留まっていますから、ダビデがどこにいようと、王にダビデの居場所を伝える者がいました。ゆえに、ダビデとその一行に安全なところ、気の休まるところはありません。1節をご覧ください。〈サウルがペリシテ人討伐から帰って来たとき、ダビデが今、エン・ゲディの荒野にいますということが知らされた。〉とあります。エン・ゲディは死海のほとりにある場所で、そこにはたくさんのほら穴があり、サウル王の

追っ手から隠れるにはもってこいの場所でした。すると、2節です。〈そこでサウルは、イスラエル全体から三千人の精銳をえり抜いて、エエリムの岩の東に、ダビデとその部下を捜しに出かけた。〉

ダビデの一行は、生活に困窮し、負債を抱え、不平不満を持っている約四百人のやからです(↓サムエル22・1〜2)。かたやサウル王はイスラエル全体から選りすぐった三千人の精銳をかかえています。だれが見ても、ダビデが不利です。ですが、神はダビデを守られました。なぜなら、神がダビデを、次期イスラエルの王として選んでおられたからです。すると、3節です。〈彼が、道ばたの羊の群れの囲い場に来たとき、そこにほら穴があったので、サウルは用をたすためにその中に入った。そのとき、ダビデとその部下は、そのほら穴の奥のほうにすわっていた。〉こんな偶然って、あるのですね。サウル王は無防備です。当然のこと、部下はダビデに言いました。4節です。〈今こそ、主があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたのよいと思うようにせよ』と言われた、その時です。〉そこでダビデは立ち上がり、サウルの上着のすそを、こっそり切り取った。命を奪われるか奪うかという状況においては、部下の判断が常識でありましょう。しかしダビデはそのように受け止めませんでした。6節です。〈彼(ダビ

デは部下に言った。「私が、主に逆らつて、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油そそがれた方だから。〉と。

ですが、実のところは、ダビデといえども部下の言葉、すなわち部下の正論の言葉に心を動かされた可能性ががあります。4節後半に次のように書かれています。〈そこでダビデは立ち上がり、サウルの上着のすそを、こっそり切り取った。〉と。そうは言っても、その直後の文章をご覧ください。5節です。〈こうして後、ダビデは、サウルの上着のすそを切り取ったことについて心を痛めた。〉と。ダビデといえども一時は迷ったと思われまます。人は迷います。しかし、迷うから人間です。迷った末に神の御意思を見いだし、それを選び取るところに尊い価値があると考えますが、いかがでしょうか。サウルがほら穴から出ると、ダビデも出て行き、サウル王に、主を畏れつつ礼儀を尽くして語りかけました。するとサウルは声を上げ、泣き、やや正気に戻り、ダビデに言いました。17節より20節をお読みください。これをもって、サウル王の問題は解決したのでしょうか。ふつうの小説、ふつうの映画なら、ここでハッピーエンドとなりますが、サムエル記はそのように語っていません。これが私共を取り巻く現実に近いと思われまます。26章

になりますと、サウルはダビデを殺すために再び立ち上がっています。しかし、ダビデの決意は変わりません。「主に油注がれた方に手を下すことはできない」と。こうしてダビデはイスラエルの王となるべく道に導かれて行きます。

三、御計画が実現するために

ダビデは、なぜ順調に次期イスラエルの王とならなかったのでしょうか。ここに、主のなさることの不思議があります。ピジョンが与えられても、私たちが考えるように、あるいは願うように、実現することは、まずありません。神は、時間をかけて私たちを練り鍛えられるようです。そのために、自分が苦手な人をそばに置くことを許されることもあります。そういう状況に置かれて、主の御意思が何であるかを見いだし、一つ一つお従いして行くことをとおして、私たちを整えられます。

また、主が指し示された目標を急ぐあまり、邪魔者に対して自ら手を下してはならないことを教えられます。ダビデはサウル王に自分から手を下しませんでした。サウルが主から油を注がれた王だったからです。ですが、私たちが自分から手を下してならないのは「サウル王」だけではありません。私共の周りにいる一人ひとりは、キリストがその人のためにも十字架で死んでくださった人たちだからです。